

— 学術大会報告 —

第14回聖路加看護学会学術大会を終えて

堀内 成子¹⁾

晴れた稲刈り月の最終土曜日に「ファーストクラスをめざす道—ケアの未来を拓く—」と題して第14回聖路加看護学会学術大会を開催しました。全国から集まった254名の皆様と共に朝9時の総会から夜7時30分の自由集会まで多くの学びを得ることができました。参画していただきました皆様に感謝申し上げます。

聖路加の創設者であるトイスラー博士と同時代を生きた清里の父ポール・ラッシュ博士の言葉「Do your best, and it must be first class. 最善をつくせ、しかも一流であれ」を掲げ、この道に続く職業人になるとはどういうことかを考えようと企画いたしました。

研究・教育・実践の分野で活躍なさっている第一線の演者5名からのReview Lecture（系統的な講義）と会場からの質問という形式で行いました。

会長挨拶に続く田中美恵子氏の講演では「解釈学的現象学（Hermeneutics Phenomenology）」と「解釈的現象学（Interpretive Phenomenology）」の違いを明言され講演はスタートしました。質的研究の底にある現象の「解釈」という営為は、最もマニュアル化がなじまないと説かれ、なぜなら「方法論的態度」のことを言っているに過ぎないと指摘されました。実証主義的立場と解釈的立場における科学哲学パラダイムの違いをおさえ、デカルト、フッサール、ハイデガー、ベナーらの理論の特徴をわかりやすく要約して潮流を解説していただきました。

続いて辻恵子氏の講演は「概念分析からプログラム開発へ—困難な決定を支える—」と題して、遺伝カウンセリングと出生前検査を受けるカップルの苦悩に対する支援を題材に解説していただきました。聖路加看護大学院博士後期課程の必須科目にある理論看護学の中で行われる概念分析の実際を紹介するとともに、Shares-Decision Making の概念分析結果から、当事者を主人公にした遺伝相談サポートプログラムを考案し、その評価を行った研究プロセスを示していただきました。

午後は2階ラウンジでの6群・26演題のポスターセッションの発表が行われ、地域看護、助産学、基礎看護学、国際看護学、健康教育、看護教育学、看護管理学など広範囲な看護領域に渡りました。発表者と質問者との距離は近く、夏のような熱気となりました。とりわけ第6群は英語を用いての発表と質疑が行われ、大学院外国人特別留学生も民族衣装で誇らしげに発表する姿が見られま

した。

再び講堂へ移動しての三輪建二氏の講演＜教育：省察的实践をめざす成人教育＞「おとなの学びを創る—省察的成人教育—」では、実践の反復経験から育った暗黙の理解を明らかにするというReflection-in-Action（行為の中の省察）の解説に続き、会場からの質問に対しては、職場においては「物語るカンファレンス」をもっと盛んにして省察的实践を広めてはどうかとの提案をいただきました。

教育講演Ⅲ＜実践・熟練者による技の伝承＞では、毛利種子氏に大会長が質問するという対談形式で「誕生を支えるプロの技—産婆のこころと助産婦としての歩み—」と題して、60年の実践が静かに語られました。常に謙虚に主人公である産婦を脅かさないように存在する、まるで「借りてきた猫」のようにひっそりと佇むケア。そして助産婦として研鑽するべきことは、時間をかけて努力して技を磨くという姿勢に、多くの参加者は襟を正す思いをされたことと思います。

最後は「地域で最期まで生きることを支える技」と題して、実践と研究を通じて在宅ホスピスを提唱してきた川越博美氏の講演でした。理解の得られない在宅ホスピス緩和ケアの普及に、市民を巻き込んで「家で死ぬるまちづくり」に奔走する姿がうかがえました。変化の前には必ず障壁があること、それでも続けていく意味を熱く語っていただきました。また、ご自身の闘病経験から看護師にもっと必要なのは「説明力」であると激励もいただきました。

聖路加看護学の実践重視の哲学は、時に冒険であり困難が伴うものでしょう。学会の場での討議を通じて現状に変化をもたらす挑戦をすることが、創設者トイスラー博士の、またポール・ラッシュ博士の志に通じるのではないかと実感した1日となりました。

なお、次ページ以降に教育講演の内容抜粋を掲載しております。講演概要をご理解いただきたく、演者それぞれから、講演で用いたパワーポイント資料に沿ったもの、あるいは講演資料に加筆していただいたものをお寄せいただきました。資料を読むことで、新たな知的刺激の世界にひたって尽きせぬ探究の道を進んでいただければ幸いです。

1) 聖路加看護大学、第14回学術大会長